

## 地盤工学会 ベテラン会員座談会 会議録

地盤工学会 男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会

2011年11月4日（金）、JGS会館会議室にて

本座談会は、地盤工学会の今後の会員サービスの在り方について考えるうえで、これまで地盤工学会の発展に尽力されたベテラン会員の方々に地盤工学会に対する思いや期待等を自由に語っていただきご意見を頂戴したいという趣旨で、男女共同参画・ダイバーシティに関する委員会主催により実施しました。

座談会出席者（順不動、敬称略）：

- 阿部 裕（鹿島道路）
- 斉藤邦夫（中央大学理工学部土木工学科）
- 田中 荘一（深田地質研究所）
- 寺師昌明（地盤コンサルタント）
- 沓沢貞雄（NPO 主宰）
- 若松加寿江（関東学院大学工学部社会環境システム学科）
  
- 末岡 徹（コーディネーター ダイバーシティ委員会オブザーバ）
- 桑野玲子（地盤工学会男女共同参画・ダイバーシティ委員会委員長）



座談会に先立って、地盤工学会の現在の活動状況、および会員動向の紹介がありました。

- ・ 地盤工学会はこれまで 60 年余にわたって発展を遂げてきた。2010 年 11 月に公益社団法人化し、さらなる飛躍が望まれている。一方、2011 年 3 月 11 日には、東日本大震災により東北 3 県を中心に甚大な被害が発生し、それを受けた学会の調査・研究活動、情報発信等が活発に行われた。
- ・ 2011 年 11 月現在の正会員数は約 8000 名で、1997 年以来（約 14000 名）急速に減少している。これは、2004 年の中長期財務検討委員会や 2005 年中長期ビジョンで会員動向を検討した際の悲観的シナリオに近いラインをたどっているといえる。特に若年層の入会が滞っており、将来の学会活動の維持が危ぶまれている。
- ・ 社会の流れを受けて、建設関連学会の中ではトップをきってダイバーシティ推進に取り組んでいる。学会に集う多様な会員のそれぞれの個性を尊重し、活躍の場を提供し、会員相互の活発な交流を促すことにより、学会活動の活性化を促すことを目的としている。ダイバーシティの対象は様々であるが、まず男女共同参画の取り組みから始めている。

#### 座談会記録

末岡： 今回この座談会で初めてお互いに顔を合わせた方もおられると思うので、1 人 2 分ぐらいで結構ですから、地盤工学会の関わりとか、これまでの活動とか、そういうことから始めたいと思います。まず自己紹介を田中様の方からお願いします。

田中： 公益財団法人の深田地質研究所に所属しております田中です。私どものところは今度公益財団法人ということになりましたので、公益法人として地盤工学会のことについていろいろと意見なり、私の考えなりを述べさせていただければと思っております。

もともと私は大学では探査工学の研究室におりまして物理探査、特に比抵抗とか電磁法探査など、地盤問題への適応ということでいろいろやっておりました。

それで、実際にはトンネルとかダムとかということでしたので岩盤問題にどんどん傾斜して、そのうち物探から岩盤工学の方に移ったわけですけれども、昭和 45 年に修士を修了しまして応用地質調査事務所、今で言う応用地質株式会社に入社しております。結構いろいろなコンサルタント業務をやってまいりましたので余り細かいことは申しませんが、61 歳で応用地質を退職、役員を退任しまして、技術士事務所を立ち上げて、縁がありまして応用地質の母体である深田地質研究所に入って、今そこで理事長をやっております。

この 4 月 1 日に公益財団法人に移行登録ができたのですが、公益財団法人の認定を取るための作業に、ほとんどこの 3 年没頭しておりました。これから公益法人としてのいろいろな新しい活動を展開していきたいと思っております。

そういう意味では、地盤工学会も公益認定を受けられましたし、しかも非常に

近いところで近所ですので、歩いて5分のところですから、お互いに公益法人仲間としていろいろと協力できれば、またいろいろと御支援いただければと思っております。

末岡： ありがとうございます。次は地盤工学会の副会長を経験された寺師さんからよろしくをお願いします。

寺師： ここには、地盤コンサルタントという肩書きで参加しています。その前にどういう経歴かということをお話しすると、22～23年、国の研究機関にいました。今は港湾空港技術研究所と言いますが、昔は港湾技術研究所といいまして、主として埋立てとか地盤改良というのを研究テーマにしていました。つまり技術開発、それから大型の遠心を導入した模型実験とか、そういうようなことを20年ちょっとやっていたのですが、早期退職をして、その後、今度は20年弱を日建設計という設計事務所にて過ごしていました。そこでは、やはり研究的な色彩が強い調査をやらせていただいて、北九の空港の話であったり、いろいろなところで設計ではない形のコンサルタントをやってきました。それで、2年前に退職をいたしまして、当初の予定としてはそこでもう一切、足を洗おう。汚い仕事から足を洗おうと思ひましてあちこち旅行したいと思っていたのですけれども。

末岡： その汚いというのは泥ですか。

寺師： 泥が汚いという話です。別に汚職をするとか、そういう意味ではなくて、泥から足を洗おうと思っていたのですが、いろいろ声を掛けてくださる方もあったりで、今はフリーターという立場を名刺に書こうと思ったら、フリーターというのは使えないんですね。フリーターというのは30代ぐらいまでらしいです。それから、中高年フリーターというのがあるようですが、これが60歳ぐらいまでらしいのです。名刺に書こうと思ったらやはり定義を調べなければいけないので、ウィキで調べたらどうもそうらしい。そうすると、今はフリーターという言葉も使えないですね。しょうがないから、フリーランスのコンサルタントという形にしました。

現在は、杭の圧入を主としている会社がありまして、そこに技術開発の協力をさせていただくとか、あるいはネット上でいろいろな国からアドバイスしてくれというのがあったりするので、そういうものにアドバイスをすとかということと自由で過ごしている。ワークライフバランスでは、ぐっとライフ側に時間を割いているというところがございます。よろしくをお願いします。

末岡： ありがとうございます。大変、印象深い自己紹介でございます。では、斉藤さん、次をお願いします。

斉藤： 皆さん個性ある自己紹介で、どのような切り出しでやろうかなと思ったんですが、極めてノーマルにいきたいと思います。

昭和45年に大学の学部を終えまして、その後、大学院で2年間、それから公務員試験を受けて、どういうわけかそういう試験の結果をけりまして大学に3年間

ほど残りました。更にその延長として東工大の方で12年ちょっとという、ある意味で助手稼業としては最長不倒距離を記録したのではないかと考えておりますが、そういう中でいろいろと皆さんから非常に貴重な意見をいただく、あるいは勉強の機会をいただいて今日まで至っておりますけれども、今、勤めている中央大学においては10年ほど勤務しております。その前までは寺師さんと同じところで机を並べていた。実際には仕切りがありますから並べていたわけではございませんけれども、一緒の仕事、職場にいたということでございます。

今は理工学部土木工学科ということですが、3年前に実は土木工学科を私どもは廃止いたしましたして都市環境学科という形になっております。結果的に、名前が変わったということにおいてどういう事柄が起こったか。女子学生が20%を超えました。それから、今年の入学の状況から申し上げますと、外国人の留学生が約10名ということですので、言ってみれば今日のこの委員会、座談会で皆さんの御意見をいただきながら我々の学科運営の中にどう反映していくかということで参考になるんじゃないかということで参った次第でございます。一応、地盤工学を私は学生に教える立場でございますけれども、国生先生とちょうど地盤工学1・2を分けるような形でやっているということでございます。

それからもう一つ、後で申し上げる機会があればと思うのですが、研究開発機構というところで石原先生、太田先生というような極めて著名な先生をお招きしてユニットを立ち上げてございます。見かけ上の責任者ということでやっておりますが、やはり偉い先生を上にごいただくというのは非常に苦しい面もございます。しかし、そこで得られるいろいろな機会、チャンスというのは私にとって非常に貴重なものになっているということでございます。

今日、この座談会は非常に楽しみにしておりますので、ひとつよろしく願いいたします。

末岡： どうもありがとうございました。では、続きまして、阿部さんよろしくお願ひします。

阿部： 阿部と申します。ここに書いてありますように、今は鹿島道路というところに入社しまして、今から40年前の昭和46年にいわゆるゼネコンの鹿島建設というところに入社しまして、すぐに研究所に配属されました。昭和46年というのは多摩ニュータウンとか、そういう大規模な造成工事が盛んなときで、その工事も担当していましたが、こんなところに住む人がいるのかなと思ったのが一番の印象でしたが、実際は今そこに住んでいます。

研究所ではどちらかと言うと土の構造物、そのころ盛んでしたダムとか、それから空港とか高速道路関係の設計とか施工技術に関する研究とか現場の支援ということで、ダムの転圧試験とか、要するに現場の最前線を走り回っていたというのが実態です。その後は、研究としてはやはりそういう土構造物、それからケー

ソンとか、ここにおられる寺師さんとか斉藤先生に御指導いただいて補強の盛土とか汚染土壌関係の仕事をやってきました。それで、60歳で定年になって関連の道路会社の鹿島道路というところに入って5年間いて、今はまたその関連のエコロードという舗装とか一般土木工事をやっているコンサルの経営をするようになっていきます。

その間、ライバル会社であった大成建設の末岡さんとは昼に夜に励まし合いながらここまできたというのが実態です。以上です。

末岡： 大変、ユーモアのある御発言ありがとうございました。続きまして、沓沢さんお願いします。

沓沢： 沓沢と申します。ここにNPO主宰と書いてありますけれども、決してそんなことをやっているわけではありませんで、現在は無職でございます。

たまたま私は学生時代に地質の単位を落としそうだったものですから、その研究室に入ったら多分単位がもらえるんじゃないかと思ひまして研究室に入りまして、それで土質を勉強しました。その後、地盤調査の会社に40年近く勤めまして、そういうわけで完全にリタイアしております。

その会社では主に地盤調査と、あとは軟弱地盤の解析と言って、要は安定計算を一生懸命やっておりました。学生時代も卒業研究が地滑りの安定計算だったものですから、それ以来ずっと土の強度と言うんですか、せん断抵抗とかせん断強度とかが盛土の安定性とどう関連するのかというのがいまだによくわからない。イメージとしてなかなかつかめなくて、いろいろなせん断試験方法がありますよね。それをどういうふうに組み合わせてそういう安定計算の定数として使ったらいいかわからないまま50年近くなっております、いまだにわかりません。

そういうようなことで、まだ自分としては技術的には中途半端だと思っているんですが、年だけは相応に取りましたので会社を辞めまして、今は、普通は悠々自適というらしいんですけども、私の場合はきゅうきゅう自適でございます、きゅうきゅうとしながら自分の好きなことをやっております。

その中でたまたま何もやることなくぶらぶらしていたら、家の前のところで、これから上総堀りをやるという話がありましたので、ボーリングというのは会社の時代にたくさん口ではやってきていましたが、実際どうやるのかなと思ひまして参加しましたらえらい大変な思いをしました。20~30メートル掘るのに数年かかりまして、それでも何とか井戸を掘りまして一応水は出るようになりました。ずっとそういうことの技術の伝承をやっているグループが、やはり千葉県は地元ですのでありまして、そういう人たちからいろいろ指導していただきました。

そういうわけで、今は多分、皆さんとはちょっと違って、完全な無職かと言うと必ずしもそうでもなくて多少は色も付いておりますが、ほぼ無職の状態なので、

こういう立場での学会の会員がいるんだということをここでお話させていただければと思います。以上です。

末岡： ありがとうございます。まさにダイバーシティの幅の広さの典型みたいな感じでございます。最後に、若松先生よろしくお願ひします。

若松： 若松加寿江と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

皆さまとても輝かしい御経歴をお持ちの中で、自己紹介がだんだん憂鬱になってきました。私は地盤工学会に入会して40年で、私より前に入られた女性会員の方はいらしたかもしれませんが、女性で研究発表会で発表したのは最初だったのではないかと思います。ずっと女性は私1人でした。少しずつ女性会員をお見かけするようになったのは10年以上してからだと思います。

現在は、関東学院大学の工学部の社会環境システム学科にあります。その前は、防災科学技術研究所に契約研究員として4年ほどおりました。その前は、非常勤講師などを少しはしたものの基本的には25年間無給の研究員で研究活動をしてきました。

私が地盤工学と出会ったきっかけは、日本女子大学の住居学科3年に在籍中、非常勤講師の竹山謙三郎先生という初代東京地盤図（1959）の編纂に係わられた先生に土や地盤のことを教えて頂く機会がありました。黒板いっぱいを使って江東区辺りの丸の内谷を含む東西断面図をメモも見ずにお書きになり、その解説の語り口がまた随筆調で、すっかり地形や地盤に魅せられてしまいました。4年生になって卒論は、竹山先生のご紹介で、当時大久保にあった建築研究所で岸田英明先生のご指導を頂きました。卒論のタイトルは、「がけ崩れに関する統計的研究」で、狩野川台風のときの多摩地区のがけ崩れのデータを基に降水量との関係やすべりのモードなどを検討しました。建研で初めて東京地盤図の実物を見ることができ、暇にあかせてボーリング柱状図を眺めていました。その辺がそもそも当時の女子学生としては変わっていましたね。

その後はどうしても地盤のことがやりたくて、早稲田大学理工学研究科の建設工学専攻に入学しました。私自身、学力面で未熟ではありましたが、当時工学分野での女性を取り巻く社会環境が劣悪で、専門を生かした就職先もなく、随分苦労いたしました。ずっと無給の研究員で、どうしてここまでやってきたのかと皆さんに聞かれることがあります。撤退するのが嫌いな性格なんですね。

20年前に『日本の液状化履歴図』という大型本を出して私の液状化の履歴に関する研究が少し有名になりました。私のことを液状化履歴データの収集家とされている方がおられるようですが、ちょっとしたことが研究のきっかけでした。大学院修了後、就職先もなく恩師の古藤田喜久雄先生のところで仕事の手伝いをさせて頂いていました。先生が1964年の新潟地震の液状化の話をよくされていて、新潟の地盤は20m掘っても砂地盤だけれど、その砂が緩いか硬いかによって液状

化発生の有無の分かれ道になった。液状化が首都圏でも起きていたか、1923年の関東地震の記録をちょっと調べてくれないかというようなことを言われました。

いろいろ調べていると、東京にも液状化は起きていた、液状化地点のボーリングデータを見ると、全然新潟のような地盤じゃないんです。いわゆる有楽町層下部のシルト層の上に砂層が2～3m乗っているような地盤でした。こんな地盤は日本中どこでもあるのではないかと思ったんですね。それから色々と知りたがり屋の虫が始まって、関東地震で液状化したのなら安政の江戸地震では同じような所で液状化したのか？とか、関東平野が液状化するなら濃尾平野も液状化の記録があるはずだとか、対象範囲が時間軸を遡り、空間的にもだんだん全国に広がっていきました。いつも液状化探しばかりやっていたわけではありませんが、液状化地点の地盤条件を調べるために集めた液状化履歴データが3000地点以上になり、公開を勧められて1991年に出版いたしました。

その後、1993年の釧路沖地震を皮切りに日本が地震活動期に入り、1995年兵庫県南部地震をはじめとして各地に多数の液状化が発生しました。『日本の液状化履歴図』の増補版を出すのが私に残された人生の責務じゃないかということで、5年ほど前から準備をしていましたが、準備をしている最中にもまた地震が起こってしまって液状化地点を追加しなくてはならない。やっとの思いで今春『日本の液状化履歴マップ 745-2008』を上梓しました。発売日は3月18日でしたが、ちょうど見本ができ上がったときに東日本大震災が起きました。最初は津波被害が注目を集めていましたが、その後だんだん液状化被害がクローズアップされ、マスコミの取材も随分受けました。私の本も少しはお役に立つかなと思っています。何より、震災の前に上梓できて良かったとホッとしているところです。

だいぶ長くなりましたけれども、以上でございます。どうぞよろしくお願いたします。

末岡： 四十数年にわたる御経験だと思うんですけども、たしか2か月ぐらい前に朝日新聞で人物像みたいところで御紹介されていたような気がします。

若松： 朝日新聞の「探求人」というコーナーですね。私のところに東日本大震災の液状化の取材に来た記者が、話を聞いていて迫力を感じたから是非と言われました。そんなところで紹介されるのは恥ずかしいと思いましたが、再三の要請があり、私は苦勞ということに関しては人に負けない人生を送ってきたので、私の記事を見て勇気を持っていただける方もいらっしゃるかもしれないと思い、取材をお受けした次第です。

末岡： 大変感銘を受けた自己紹介です。どうもありがとうございました。皆さんが大体どういう方かというのがわかったところですけども、これからメンバー全員で結構ですから自由に発言していただきたいと思います。

まず、地盤工学会との関わりというところで、順番は結構でございますので御

紹介をお願いします。そのときにどんな活動されていたかとか、会員になってよかったのか、悪かったのかとか、辞めようと思ったのかとか、そこら辺を自由に好き勝手に言っていただいで結構でございますので、よろしくをお願いします。

沓沢： 私は、さっき会員証を見たら64でした。だから、私から申し上げます。

そういうわけで、ど田舎の学校を出て花の東京に出てきまして、こういう商売をやるには学会等に入っていた方がいいだろうと思ったので、その当時は多分かなり敷居が高かったというか、高いと思ったんですよ。というのは、推薦者2人とかという時代で、何かそういううわさを聞いたんです。そういう推薦してくれる人はいないかなと思って、とりあえず事務局に入りたいんです。それだったらいつでもいいですよと言われたので、そんなに敷居も高くないんだなと思って一応入りました。

それで、入りまして数年は、これまでほとんど学会の活動というのはないんですね。要は、50年近く会費を納めていた。そういった意味では一番貢献しているのかもしれませんが、それでも今から30年ぐらい前、まだ新橋に事務局があった時代に、主に事業部の委員会で講習会とか出版事業だとかというのでいろいろとお邪魔していた記憶はあります。

その後、そういうことから完全に退いて会社を辞めたら暇そうなので、千葉で人が足りないから地盤工学会の事務局の手伝いをしてくれないかと言われたので、今は千葉県のグループの幹事ということでやっているんですが、それもそろそろ年なのでやめようかと思っています。

末岡： 先日、千葉県グループでまさに被災に遭って液状化したところの見学会をすごく段取り良くやられたと聞いていますけれども。

沓沢： ありがとうございます。あれも県の職員の方が幹事としていらっしゃったので、そこをお願いして、県の土木施設で被害のあったところについてちょっと見せていただきましょうということで皆さんにお話をしているんですね。そんなことで、思い出すと発表会で1～2回発表したとか、あるいは学会誌に何回か出したぐらいなんです。そういった意味では、私みたいな人がこんなところに来てお役に立つのかなということはちょっとあったんですけれども、学会との関わりはそんなところですよ。

あとは、学会でそういう委員会などを通じて先生方とお知り合いになって、たまたま私の場合は資格試験で技術士の資格というのがありますね。あのときの面接の先生がたまたま委員会で御一緒した先生だったので、うまく点数を付けてくれたのか。あるいは、こっちもやっぱり見たことのある方ですから、多少安心してちょっとゆとりがありますから、うまくすり抜けて合格できたというか、こういうこともあるんだなという感じで、そういう試験でたまたまそういうふうにお会いするというのはなかなかないことなのかもしれませんが、私の場合は



たまたまそんなことがあったりしました。

あとは、やはり学会で学会誌を昔はもっとやさしく読めたんですよ。寝転がって読んでも一応ある程度は理解できた。今はもう年を取ったからかもしれませんけれども、非常に難しくなりまして、なかなか読み切れないですね。もう数行読んだら眠くなっちゃう。若い人はすっと入ってくるのかもしれませんがから年のせいかもしれませんけれども、非常に専門分化してわからないですね。そういったわけで、昔はそういうものから最新の技術の内容を吸収できたということがあったので非常に役立ったのかなと思います。

でも、最近は睡眠剤代わりにはなりますが、余り役に立たないということでございます。

末岡： ありがとうございます。地盤工学会のメンバーであるだけでも相当、昔は価値がありましたね。大変、実際に役に立ったようなことを紹介していただきましてありがとうございます。阿部さん、どうですか。

阿部： 私は入りたいというより、先ほど言ったゼネコンの研究所ということで全国大会とか学会に発表するというのが業務の一つで、それが会社のPRということですから、必然的に入らざるを得ないというか、流れ作業のように入会したというのが最初ですね。

その後、入ってから今、言われたように委員会活動とか、いろいろなことを通して先生とか他の分野の方と知り合いになって、いろいろな有益な情報をもたらしたりして、勿論、自分にとってもそういう意味で、学会というより、そこで知り合った人を通しての情報が一番役に立ったということですかね。今、言いましたように、私たちが育ったころは高度成長だから深く考えずに会費も納入できるし、余り深く考えたことはなかったです。

さっき言った『土と基礎』というか、雑誌で一番役に立ったのは、当時は非常に少なかったですけども、現場の設計例とか、現場の計測例、施工例ですね。最近でこそ時々、龍岡先生の御意見もあるんでしょうけれども、そういうのが少しずつ増えてきて、そういう面では我々の業界でも助かっていると思います。

ただ、ちょっと外れますけれども、『土と基礎』というか、雑誌が有効かどうかとか、いろいろなアンケートがあっても、前に寺師さんも何か言われたと思うんですけども、そういうアンケートをしたり、何か意見を聞くのは身内の人の話を聞いているだけで、ほとんど会員というのには『土と基礎』が来てただ置いておいて、しょうがないから会費を払っている人とか、アンケートに余り関係のないような人の意見というのとはほとんど反映されていないように思うので、こういう時代になるとそういう人とか、地域で本当に最前線で活躍しているような技術者の意見とか、そういうのが反映されない限り、ちょっと飛躍しますけれども、会員の増加だとかダイバーシティとかと言っても、限られたようなダイバーシテ

ィになるんじゃないかということは危惧しています。

末岡： 非常に耳が痛いというか、問題点の御指摘があったような気がします。

沓沢： どうしたらこういう会費を納めているだけの人の意見を吸い上げることができるかですね。

阿部： そういったことを、何年か前に寺師さんが言われていたのを読んだような気もしたんですけれども、どうですか。

寺師： 何か言ったような気もしますね。

阿部： かなり前からそういうことはあったんだと思います。

齊藤： たしか当時の動向からしますと、会員支部に関する委員会ができて、まさに今、阿部さんがおっしゃるような形でもって、会員に対するサービスというものをどうのように考えて、どんな形でもって提供できるか。特に、その中において関東支部、関東域の人間に対しては支部活動もない中で、一体これはどうなんだというような話が一時期、わっと出てまいりました。

たまたまそれに私は委員として参画したんですけれども、間違いなくそういう会員に対するサービスというものを大きく前面に取り上げて、地盤工学会が活動の意味合いを変えようとしたのかな。多分、その当時が土質工学会から地盤工学会に名前が変わるタイミングだったと思います。

末岡： 名前が変わったのは、たしか 1995 年ぐらいじゃないかと思います。今から 15～16 年前ですね。あのときは、土質だけじゃなくて岩盤の分野もキャッチフレーズとしては正面から扱うんだみたいな話も聞きましたね。

田中： それについて言いたいことがありますして、ちょっと発言しておきたいと思います。

ちょうど平成 5 年に基準部の方から話がありました。今度、土質工学会から地盤工学会に変わるに当たっていわゆる岩の領域をどう取り込むか。それについて、まず基準部としては岩に関する試験法の基準化というものを考えていくべきだと思う。それについて具体的な検討をしてほしいということで、委員長は吉中先生で、私が幹事長で、その岩の試験・調査基準化検討委員会を 2 年間実施したんです。

そのときに、それまで当然、岩の関係の指針だとか基準というのは他学会であったり、あるいは海外であるわけですから、そういうものを整理して、地盤工学会の基準として全部そろえたい。それが理事会の意向だということで、かなりなメンバーに集まってもらって大々的な調査をやって、それで中身を整理したんです。

それで、このぐらいの冊子を平成 7 年に報告書で出したんですけれども、それを進めるに当たって、あるとき理事会の理事の方、何人かから吉中先生と私は呼び出されました。あれは多分平成 5 年か 6 年のころだったと思いますが、なぜ今ここで岩の領域を取り込まないといけないのかと、我々は追及されたんですよ。

それはおかしいじゃないかと反論しました。理事会からの意向で我々は岩の領域を取り込んで、地盤工学会として岩から土まですべて地盤問題を取り込んだ学会にしようということに賛同して、多くの岩盤関係者と検討を始めていましたのに。おれは土質なんて関係ないという鉱山関係の人まで引っ張り込んだわけです。それでいろいろと進め出したら、一体なぜ今ここで岩の領域を取り込まないといけないかと。

結局、それはその場で特に大きな問題にならずに一応終わらしてそのまま進んだんですが、そもそも岩の領域の取り込み方というのが中途半端で、それがいまだに続いていると思っています。

地盤工学会の課題の一つは、今まで土質という中で非常に安定的に運営されていた学会が岩というものを含む。岩というものを含むということは、当然そこには鉱山があり、石油があり、全然違う異分野との接触もあるわけですね。そういうのはなかなか取り込めないけれども、その成果を取り込まないといけない。そこにはやはり非常に難しい、今までの土質という観念でとらえ切れない地質学や岩盤力学などいろいろなものがあるわけです。それがなかなか今、取り込めていないのではないのでしょうか。

だから、何となく今までの土質工学会は、ややぬるま湯的な、非常に安定化した学会の中でそういう異質なものを取り込んでもっと大きなものにしようと言ったときに、それが十分に理解されないで、咀嚼されないでいまだにずっと残ってきたところがあるのではないかという気はしています。

それで、ある時期は、岩の領域関係をやっている人たち、あるいは岩にいろいろな関係する産業に関係する人たちも地盤工学会に入っていたと思いますけれども、今はどんどん抜けていると思います。

そういう意味では、やはり地盤工学会の今やっていることが、地盤問題を大きく広くいろいろなものを取り込んだ形になって進められているわけではどうもなさそうだという感じを強く持っていて、そのことだけは今日申し上げなければいけないと思っていました。

阿部： 同感ですね。例えば地質関係はちょっと岩盤と似ていますけれども、この講座で技術の伝承でしたか、JRのOBの大島さんか何か地質のことを書いたと思うんですが、要するに現場を見ることが大切で、わかりやすく言えば現場の地質的なことが余りわからないでのり面の安定とか設計をよくやっているなということだったと思います。

私もそのとおりで、現場とかに行ったらそういう地質的な素養がなければ、いわゆる地盤ののり面の計算でも何でも余り意味がない。そういう実態があるにもかかわらず、例えば学校の地盤工学の教科書にしても、地盤工学の最初にそういう地質的なこととかほとんど書かれていないんですね。

地質のそういうことがあって、水の問題があって、のり面の安定とかという流れならばいいんですけども、今、田中さんが言われた岩盤のことでは亀裂の問題とか、そういうことがなくてちょっと離れて地盤工学が成り立っているというのは昔から大変不満でしたね。

不満だということは、会員もそういう人は入らないし、必然的に関係ない学会だなということは強く感じていました。

田中： 今、私は岩盤と言いましたけれども、阿部さんがおっしゃったように地質・岩盤とだけ思えば結構だと思います。会員の減少の図を見て10年の間で半数になるというのは、普通幾ら何でもやはり異常ですよ。

寺師： ちっとも異常じゃないんですよ。実はもう十数年前にそういう会員数の予測をしているんです。それで、そのラインにきれいに乗っているんですね。何を根拠に予測したかという、日本の人口、少子高齢化、それから団塊の世代が退会していく、建設投資が減っていくというような要因を入れたら、そのぐらい減って僕は不自然ではないと思います。

沓沢： ただ、土木学会の方は増えていますね。

寺師： 増えていないでしょう。

末岡： 増えてはいないけれども、これよりはかなり減少の割合が少ない。コンクリート工学会などは微減だけれども、5%とか10%ぐらいの減で済んでいます。

田中： そうでしょうね。私の関係している学会も、大体そんな大幅な減りというのはどこもないですね。だから、さっきこれを見て、なぜだろうとまず思いました。

寺師： 退会した人の退会理由というのはフォローしているんですか。

末岡： 会員支部部で、今まさにちょうどやっている最中です。それこそアンケートで、全員じゃないですけども、事務局に御尽力いただいてやっている最中です。7～8年前から地盤工学会が会員にサービスするという原点を強く意識して、まさにそういうことを考えていかなくちやいけなかったんじゃないかなと考えている次第ですけども、遅まきながらやっています。

齊藤： そういう退会理由を調査して、そういうものを集計した結果においてどんなトレンドが見えるのか。それは重要なことだと思うんですけども、ただ、地盤工学会が会員の方々に対してどういう情報が提供できるかという点に関して、あるいは地盤工学会そのものの改組的な意味合いも含めて、対象の在り方を含めて、まず平成9年に地盤環境工学の現状と将来という事柄で地盤環境工学研究連絡委員会、たしか寺師さんは委員だったと思いますが、そういう中で土質工学から地盤工学へのパラダイムの変換というような形で取り組んでいますね。これはとにかく力学の言ってみれば学会からもう少し分野を広げて、人文系のそういう方々も巻き込むようなものに組織なり、あるいは在りようというものを变化させていくんだ、というものでした。それから、平成12年には更に地盤環境と、環境にむし

ろ軸足を置いたような形において地盤工学会の在り方が再度問われている。要するに、新しいディシプリンの創造に向けてということで、これは非常に意欲的な冊子になっていると私は思っております。更に、平成15年には今度は人材の問題です。だから、順を追っていきますと、まさに学会が学会として存在する上において何をしなければいけないのかという提言というものが着実に行われている。しかし、行われているんだけど、現状において会員の減少というものに対してストップがかけられない。まさにそこにひとつ地盤工学会が学会として本来的な意味の活動を行う上において、自らが自らをチェックする仕組みがどこにあるのかが見えてこない。

私は今こういう立場に立っておりますからかなり勝手なことを言いますけれども、もし本当に第一線でこういう学会活動をやっていたらなかなか言えないことだと思うんですが、そういうところが少し懸念されるというのが正直なところです。

田中： それは先ほど申し上げましたけれども、そのパラダイムの大きな転換というのは本当にパラダイムの転換だったのか。会員数を増やすとか、あるいは事業の数を増やすとかというところに主体があって、本来的な学会の本質をもっとどうするかという議論が十分なされなかったのではないか。勝手な言い方で、余りこういう議論はよくないですが。

斉藤： そういうことは私の記憶にはないんですが、むしろ学会は確かに今まさに立ち向かうべき課題は当然あるだろう。しかし、学会あるいはアカデミックの分野においては、ちょっと注目が集まらないようなものでも、学会はそういうものをとにかくサポートしていかなければいけない。これが基本だというように議論が展開されていたという記憶を持っています。

決してテーマとして、その時代の流れにおいて脚光を浴びるものだけではなくて、学会の在り方というのはそうじゃないと、その議論まではしっかりとされておりまして。

寺師： 今、斉藤さんがおっしゃっていたのは地盤環境研連の報告の話じゃないかと思うんだけど、あれは地盤工学会でやっているんじゃないんですよ。学術会議の専門委員会で、地盤と環境という切り口でこれからどういうふうに学問を展開していくべきかということをやっているお話で、土質工学会が地盤工学会に変わるとか、そういう流れとはまた別の次元のお話なので、そこはちょっと混同しないようにお願いします。

田中： わかりました。そうすると、ますますやはり地盤工学会が変わるときに岩の領域を取り込むということに対してのコンセンサス、あるいはそれを取り込むことが学会の体質にどういう大きな変化を及ぼして、それが学会として今後どうなっていくのか。それを皆がどこまで認知したか。それが重要なことだと思うんですね。

それと同じことが、今回の公益法人化ですね。公益法人になるということは、どういう大きな変化になるのかということは会員のほとんどがわかっていないと思います。

公益社団法人地盤工学会、これは一体、今までと何がどう変わるのか。では一体、地盤工学会はどうするんだろう。どう変えるんだろう。それは、あの学会誌を見ていてもよくわからないんですね。それと同じことで、土質工学会から地盤工学会に移ったときも、そうすれば会員が増えるとか、そうすれば広範な活動ができるとか、ほかの分野の連携もよくなるだろうとか、割合に安易な議論でなったんじゃないかという心配があるということです。

沓沢： ただ、もう一つは、入会の動機がさっきおっしゃったように会社に入って必然的にとかで、多分、個人の意思で入ってくる人よりも所属する会社だとか、組織の自分の立場で入ってくる。だから、会社を辞めたら自動的に辞めていくし、そういう組織から外れたら必要性がなくなりますからもう辞めてしまうというような方が多いんじゃないかと思います。

そうすると、全くそういうものから離れて、個人として学会に魅力があればそういう方も残っていると思うんです。ところが、今の学会というのは必ずしもそうじゃないと思うんです。経済的なゆとりのあるときは、会社とか組織も一生懸命援助して、いろいろな便宜を図って会員になりなさいというふうに勧めてくれたけれども、最近はどちらかと言うと、そんな余分なことをやっている暇があったらもっと本職をやれというような時代ですから、それに輪をかけて辞めていかれる方が多いんだと思います。

末岡： 時代のトレンドとしてはそういうことだと思うんですが、まさに我々のダイバーシティというのは理想論かもしれないけれども、やはり技術とか文科系も含めて取り込むと言っては何ですが、それが本当は学術、技術の本質かもしれないなというところがあって、それにプラスして結果として会員の方々が喜んで参加できるような雰囲気と環境をつくるのも一つの地盤工学会の役目かなと思います。はっきり言えば、定年退職してもこれだけは喜びとして感じていただけるような学会にしないとまずいのかなというふうに今お話を聞いて思いました。

では、3月11日に東日本大震災が発生していろいろ個人個人で感じていることもあるだろうし、地盤工学会として御活躍の人もいるだろうし、仕事としてやっている人もいるだろうし、社会とかコミュニケーション関係で非常に接点がある人もいらっしゃると思うので、そこら辺を含めて余り固く考えないで結構ですので、大震災との関係も含めて是非御意見を賜ればと思います。それをきっかけに、皆さんのお話が弾んでほしいというのが私の希望でございます。では、若松先生から口火を切っていただけますか。

若松 私には3月の震災があつて、その後ガソリン不足とか計画停電で、男性の会員の方

はそれでも自転車で浦安まで行ったとか、そこまでちょっと体力がなかったのでウェブでいろいろ情報を収集しました。そうしたら、安田先生が情報共有をしよう。お互い重複したところに皆が行くよりも時間との勝負だから、お互いに分担して重複や空白域がないようにしようと呼びかけてくださって、その呼びかけのメールが私のところにもきましたので、私はウェブで収集したいろいろな情報や皆さんからの速報を整理して液状化発生地点のリストやGoogle Earthのkmlファイルを作成して、皆さんに一斉配信していました。3月末には、土木学会の緊急調査団として、地盤工学会の調査団と連携して現地を調査して回り、その後も夏頃まで関東周辺などの調査を続けてきました。

地盤工学会は、研究発表会の震災特別セッション、『地盤工学会誌』・『地盤工学ジャーナル』・『Soils and Foundations』などで他学会に比べて早期に情報発信をしています。このスピード感は評価しますが、ほとんどが招待論文で構成されています。迅速に効率的に情報発信したいという思いから発するコントロールが強すぎて、一般会員の発表機会や参加意欲を制限してしまうように思います。

阪神・淡路大震災のときは『Soils and Foundations』も公募中心だったような気がします。今はメールや携帯電話で物事がすごく早く動いていますが、阪神・淡路大震災のときはまだファックスの時代で、携帯もなかったですね。カメラもアナログで、16年間に、随分世の中がスピーディーになってしまいました。それに追いつくために意識・活動レベルの高い会員が物事をどんどん決めてどんどん運び、今回のような迅速な情報発信に繋がったのだと思います。ただ、学会活動が一見活発なように見えますが、主導的な会員と『地盤工学会誌』を読むだけの会員との間に意識の乖離を招きます。なかなかバランスが難しいですね。

末岡： そういうこともあるんじゃないかなと危惧します。

若松： 今回の特集号の話になりますが、学会誌特集号や論文集特集号に、誰でも均等にチャンスがありますから奮ってご応募下さいという姿勢、つまり、あなたはいつも読む人、私は書く人、じゃなくて、そのギャップを埋める努力も必要ではないでしょうか。さもないと、毎月配られる地盤工学会誌だけが学会とのつながりになり、だんだん読む方も、面白くなくなりますよね。

寺師： 地盤工学会誌は会員全員に配られる。だから、あれは全会員が読む人であり、場合によっては書く人にもなれるといいなという話でしょう。では、S&Fは何なのか。あれは書く人のためのものであって、読む人がいるのかというのは昔から実は気になっていた。あれは書く人のためのものである。

若松： 『地盤工学ジャーナル』はその中間的な存在として生まれたのだと思います。

田中： でも、先生が先ほどおっしゃったように、片や日本語で、片や英語で、それでいいじゃないかと事務の人が言われたと。それは、やはり二重投稿ですよ。

若松： 最初に『地盤工学ジャーナル』の特集号を出しますよとメールが回ってきて、

その後ちょっと遅れて『Soils and Foundations』の公募がありました。両誌ともまだ出版されていないので詳細は不明ですが、招待論文が非常に多く、目次だけを拝見すると、地盤工学会誌も含めて同じ方が同じような内容で執筆されるようです。ちょっとそれはフェアじゃない、普通ですと『地盤工学ジャーナル』も『Soils and Foundations』論文ですから二重投稿ですね。両誌のすみ分けが一般の会員に明確にされていない点も問題です。

田中： それだって二重投稿ですよ。大体、地盤工学会は本当に形式的に細かいことまでごちゃごちゃうるさい学会だと思うんですけども、そういう学会でありながら、今のような非常にルーズな面があるというのはちょっとおかしい扱い方ですよ。

末岡： これは、まず東日本大震災に関係するような論文の分野でそういう問題点というか、課題がありますよということですね。

若松： そうですね。ですから、一応、アブストラクトを募集して、こんな内容の論文が集まりそうだけれど、ちょっとこの分野は足りないから招待論文の要・不要を調整するというのでしたら理解できます。

末岡： もっといらっしゃいよという姿勢が感じられないということですね。そういう声があるのは事実なので、それはそれこそ編集の段階でいろいろ工夫は必要という事ですね。

若松： 私も日本地震工学会で論文集特集号の編集委員をやっていますので、広い分野で良い論文を早く集めたいという事情や気持ちは理解できます。ただし、日本地震工学会では全編公募にしています。良い調査研究をされている方がいらしたら、招待ではなくて応募をお願いすることになっています。

末岡： 結構そういうのを専門的に個人でやっている人がいるかもしれないなという感じがします。

若松： こつこつと一生懸命、地元を詳しく調査をされている方も結構いらっしゃいますね。よその地域から調査に乗り込んで調査に行ったのではなくて、地元ならではの情報も総合していろいろわかるということもあるので、そういう方たちにもウェルカムだという姿勢を見せてほしいと思います。

末岡： 大賛成ですと言いたいところだけれども、お伝えする事にします。一応それはちょっと置いておいて、今、先生の意見も踏まえて、ちょっと変わった角度でもいいですから、東日本大震災で特にこれだけはおっしゃりたいということがあったら是非お願いします。

寺師： 3月11日の地震のときには、私は神戸に出張していました。それで、東京へ帰ろうと思ったら新大阪で新幹線が動かない。どうしたんだろう。どうも東北で地震があったらしいよと。東北で地震があつて、新幹線が止まっている。止まっても1時間だなというつもりでいたら全然動かなくて、挙げ句にその日は動かなかった。僕は最近の携帯情報端末を持っていないものだから、何が起きているかわか



らないわけですね。急遽、宿を取ってホテルに入ってしようがないからテレビをつけたら津波の映像ですね。

今回の地震というのは、今までいろいろな地震被害があつて、若松先生も液状化の調査とかいろいろなさつていると思うけれども、ちょっと異質の被害が大きかったのかなというのはやはり津波ということですね。それで、現在、私は別に実際の調査に加わっているわけでも何でもないからわからないけれども、ある地域は地殻変動的な地盤の沈下が1m近くもある。沖に何mも出る。その上で地震動がくる。そして、余り北の方では液状化が起きていないけれども、液状化がくる。そして、津波がくる。そして、第2波がくる。余震がくる。こういう中で、どういう構造物でライフラインを守るべきなのかということをやはり相当、地盤工学会を含めて何か考え直すときにきているんじゃないかと感じます。

結局、今までは、特に海岸線には重力式の構造物が多いんだけど、重力式の構造物というのはあつという間に安全率が低下して動いてしまっていますね。ただ、津波以外では動いたことはないんです。だから、これからはやはり地震動並みに津波がレベル1の津波であり、レベル2の津波である。それで、レベル2の津波では変形することはやむを得ない。でも、なおかつ粘りのある構造物にしなければいけないとかということになるわけだけでも、さっき言ったように当初の津波防波堤の高さがひょっとしたら地殻変動で1m下がった状態、そこで津波がくるというときにどういう挙動をするか。大変形に至るまで相当予測をしなければいけなくなるわけですね。

それも、ある津波を止めましょうというわけではなくて、減災を目的にした構造物をつくらなきゃならない。そうすると、その変形した防波堤が存在することで第2波の津波をどこまで小さく抑えられるか、あるいは第1波も最初の防波堤が変形しつつ、どこまで波の高さを抑えて到達時間を遅らせることができたかということの予測をしない限りはそのパフォーマンスがわからないでしょう。これは、地盤工学会だけでできっこないですね。

その辺りで大震災が我々に突きつけたものというのは、地盤工学会の中だけで設定した外力では設定できないですね。どこからかもらってきた外力に対して耐えるの、耐えないのとか、あとの変形がどうのと言っているだけではだめで、避難場所をどこにつくるかとか、避難所への誘導をどうするかということも含めたものすごくトータルな議論が必要になるなというのを感じています。

それをやるのはどこだろう。地盤工学会なのか。地盤工学会は技術のツールは提供できても、そういうシステムまで地盤工学会ではやれそうにないような気がして、そこをどうするのか。

末岡： 来年の3月に地震学会とか土木学会、機械学会、建築学会、地盤工学会、地震工学会で、まさに6学会が集まってシンポジウムをやるというふうに聞いています

けれども。

若松： 6学会合同国際シンポは3月ですね。

末岡： 3月の3、4日ですね。そういうふうに6学会が集まってやると。

若松： そうですね、どこが主催でどちらが後援とか共催じゃなくて、基本的には6学会主催です。事務局は地震工学会がやっておりますが。

末岡： まさに前に田中さんがおっしゃった、岩の部分が中途半端にしか一緒にできなかったみたいなことが今回起こらなければいいですね。そういうことが地盤工学会だけではできないというのは自明ですから。

寺師： 1つの大きな役割として、地盤工学会で社会的貢献をしましょうよというわけですね。そのときに、次の三連動地震の話とか、いろいろなものがあり得ますよね。そういうときに、どういう考え方でどういう整備をすればまずは財産を守れるか、人命を守れるか、どのレベルまで守れるかという議論をしていくときに、地盤工学会の会員が一生懸命頑張ったってできるところというのは限界がありますよね。あるいは、学会が組織としてやるとしても限界がある。

そうすると、いろいろな複数学協会が集まってやらなければいけない。岩の学会と地盤の学会のようなことがこれから多分起きるわけですが、どこが主導権を握るかなんていうようなくならないことが一番大きくなるような気はするんです。委員長はどの学会が取るかとかね。

斉藤： 私は思うんですけれども、液状化という現象はとにかく若松先生を始めとして多くの方々がこの地盤工学会の中に言わば専門家としていらっしゃる。結果として、そういうものが液状化を予測するマップという形で具体的な形に結び付いている。今回の3.11の経験において、例えば浦安市とそれから地盤工学会の委員の先生方が連携する中において、今後の対策を含めてそういう動きが出ている。まさにこの社会との接点を今回のものが改めて具体化しているということは言えるんですが、ただ、問題なのはあれだけ液状化の被害というものを受けながら、マップまでつくりながら、それがなぜ市民の中に浸透しないのか。そこの広報というものの、やはり学会としての広報というようなものがもう少し謙虚に出ていいんじゃないか。

例えば、地盤工学会は今回の件に関して相当自らを反省するような形において、予測の在り方というものに対して報道でも報告されているような形になってますね。我々はもっとそういう点で身近にエンジニアリング、工学、あるいは地盤工学というものの持つ意味合いをすべからくお伝えするような、そういうスタンスを持つ必要があるんだけど、なぜそれができなかったのかというところが、ひとつ今後お考えいただきたいところということで申し上げたいと思います。

寺師： 要するに、地震が起きてからの話じゃなくて、もっと前の話ですね。

沓沢： そうですね、新潟の地震での液状化は、今から多分50年以上前ですね。それが起

きてからですから、浦安なんていうのはその後に大部分が埋立です。だから、本来であれば、あそこにそういう知識を取り入れて、ああいうことが起こらないようなまちづくりができるはずなんですね。それが、全然考慮されていないです。

それは、我々地盤の専門家の責任なのか。我々としては、そういう専門家同士ちゃんとそういう話を伝えているけれども、それを受け取った側の責任なのかわかりませんが、そういうことが全然生かされていないというのは非常に残念ですね。それで、起きた後に一生懸命我々が調べ回っても、もう元に戻らないわけです。

ですから、かなり乱暴な言い方ですけども、浦安はもう起きちゃったんだから、あれはそのままでもいい。でも、これからまだ浦安以外に全国で可能性があるわけですから、そういったところをいかにしていくかということの方が大切なんじゃないかと思います。

齊藤： 沓沢さんがおっしゃっていることに私は決して異論をとねえるわけではないんですけども、少なくとも浦安の件に関しては、吉見先生がまさにその液状化の発生を警告していらっしゃる。つまり、行政がそういう情報を持っていながら、言わばアカデミックから行政に対してそういう情報が伝達していたにもかかわらず、それが結果的に市民の生活の中に反映することができなかったということです。

つまり、アカデミックというのは直接的な市民との対話というものもありましようけれども、その間にある接点としての行政とのつながりですね。これは、災害というものに対する一つの社会システムだと思うんですよ。

そういうもうちょっと動的なダイナミックな情報交換を含めての仕組みづくりというものに対して、地盤工学会はこれからどういう方針なのか。例えば、地盤災害というのは地震だけではない。液状化だけではない。雨が降って斜面が崩れる。とにかく相当頻発しておりますから、そういう中において地盤工学会のアカデミックな役割としてのアクティビティと、それを超えて普遍的に市民なりあるいは行政と手を携えるというところの仕組みづくりがどうしても必要な気がします。

沓沢： 例えば、土砂災害なんかは急傾斜地の規定があって、そういうところにまちをつくっちゃいけないというようなことで、それが都市計画上は最近生かされるようになっていきますよね。だから、液状化しそうなところはやはりそういう建物を建てちゃいけないとか、あるいは建てるんだったらそれなりにちゃんと対応したものにしなさいとか、そういう規制をして、そういうことに取り組むようにしていかないと、なかなか100年に1回か200年に1回ぐらいの地震で液状化したから大変だと騒ぎ立ててもしょうがないような気がしますね。

末岡： 今、日下部会長が頑張っているところでもあるんですけども、やはりそういうふうに行政とか、法律とか、規則とか、そういうものが、今までは大災害の後で

動き、成立した。例えば伊勢湾台風の後、3年後にこういう法律ができたとか、別の大災害の後では、あの法律ができたとか、そういう事があった。今回はまだ十分見えないということをおっしゃってしまっていて、これだけの災害があったのにその法律、行政まで全然いっていないし、その動きもまだはっきりしないというのが大問題だという御指摘をなさっています。

田中： それは先ほど齊藤先生がおっしゃったように、その仕組みづくりをしないといけない。その仕組みづくりの中の1つがそういう法律であり、それにも関わると思うんです。それはしなければならないということ言うのが学会の役割なのか、仕組みづくりにやはりどうあるべきかということで学会が参加すべきなのか、そのところが僕は大事だと思うんです。この問題は、これから学会が本当に皆から信頼されるものになるのかどうか。それは、僕は先ほど言った公益社団法人としての本当に公益をうたった学会のあるべき姿をどう考えるかにすべてよっているといると思うんです。

齊藤： 例えば冒頭、末岡さんから地盤工学会は3つの目的を抱えていて、3つ目に社会への貢献というのがありましたけれども、この貢献という範囲をどういうように現時点で地盤工学会はお持ちなのかというところだと思うんです。

末岡： 法律などについても地盤工学を専攻した人とか、地盤工学会のメンバーが技術という面からそういうものに参画してやらない限りはあまり価値がないんじゃないかということをおっしゃっているのがこの1～2か月ですね。そういう姿勢が必要だというのは現在感じられていますが、ただ、地盤工学会全体がそうなっているかどうかはまた別の課題だと思います。

齊藤： ただ、間違いなく言えると思うのは、地盤工学会の会員の方、先ほどらい、おっしゃっているように学会誌を読んでいらっしゃるというような程度の方だけではなくて、研究発表会で発表する方においても、どちらかと言うとテクニカルな方に非常に向いていますよね。学会の構成員の中において、行政のお仕事に携わっている方の減少というものが非常に大きい。つまり、学会のアクティビティというものは単にテクニカルな意味合いの成果というものではなくて、やはりいろいろな会員としての立場の人間がここに集まることにおいて初めて学会としての用をなすんだというところをやはり考えると、支部であるとか会員の問題というのはまさにこれからの地盤工学会の存在を左右する最大の命題だというふうに私は思っております。

阿部： そういう意味では、そういう役員なり理事の構成も一般市民なり異分野の人とか、そういう人も入っていない限りは、変革はちょっと難しい気がします。でも、そういうことまで本当に今の学会でできるのかどうかはちょっと疑問ですけども。

田中： 僕もそれは大賛成で、今のままではできないと思いますよ。大体、組織の構成の在りようが偏っているように思えます。

阿部： 例えば、提言とはグレードがちょっと違いますけれども、東日本地震の先生の液化化みたいなものでも、被害とかそういうのを調査したら一般市民から見れば、そう言われたら経年的に耐震強度をどうやって高めていけばいいとか、それにはどのぐらいのお金がかかるのかとか、それから万が一、壊れたら復旧しやすいような構造は土と建物の両方でどういうふうにすればいいとか、そういうことに悩んでいても学会は一つも答えはないし、そういうのを社会にも発信していませんよね。だから、そういうつながりは徐々にやっていかないと。

若松： 8月10日にちょっと載りましたけれども、ただ、かなり難しい。

阿部： 難しいじゃないですか。我々から見たら改良すればいいとかわかる話だけれども、本当の市民が見たらどうか。そこでまた市民との乖離が出てくるんじゃないかと思えます。

末岡： 大変有意義な話が続いていますが、さらなる地盤工学会の発展に向けて、これだけはおっしゃりたいということがありましたら、どうぞ御遠慮なく。

阿部： これは私だけの意見だけではなくて、1つは定年後のベテランの会員は極端に今の学会というよりも、やはり先ほどから出ている市民の苦情処理をするような、市民と対話するようなコンサルタントみたいなものをやりたいという人が結構いる。だから、そういう意味でもし学会からNPOの活動だとか、そういうものを紹介してくれれば少しは今、興味があるとか、若い人だったらもうはっきりしていますから、こういう時代だから本当に役に立つ資格ですよ。

最近、液化化でも提案されているようですけれども、液化化判定士みたいなものとか、例えば技術士とは言わないまでも何かそういう資格を取れるような具体的に得るものがないと、今の若い人たちは先ほど言ったようにインターネットか何かで情報だけならば幾らでも入ってくるので、具体的に何かそういうものがないかという話です。

あとは、学会誌はやはり技術的なものには興味がないというか、難しい。だから、例えば若松先生のように活躍されている人間味が出る人間の紹介とか、技術だけじゃなくてその人の人間がにじみ出るような若松先生そのものを紹介するような記事があると読みやすいとか、そういう意見は幾つかあります。

若松： つくづく思うのは、地盤工学の専門用語ってすごく難しいですね。どうしてここは液化化が起きたかと言っても、地盤工学用語で説明すると難しくなる。例えば「液化化のメカニズム」と我々は普通に言うけれども、新聞は絶対にメカニズムとは言わない。「液化化のしくみ」と書くんです。でも、市民の人に過剰間隙水圧なんていう言葉を持ち出したらもうおしまいですよ。もうちょっとかみ砕いて情報発信しないと、市民とのギャップはなかなか埋まりません。東日本大震災の液化化を経験した今、市民がうちの土地はどうなんだとか、一番専門家のアドバイスを求めている時なんですよ。

末岡： そういう声は地盤工学会にも来ているんですけども、なかなかそれに正面から十分対応できていないかもしれない。

沓沢： たまたま私はさっきの上総掘りというのをやりまして、それは近くの小学校の子どもたちも一緒にやるんですよ。そのときにその地層の成り立ちだとか、地下水とはどういうものだとか、いろいろなことをその都度、説明したつもりなんですけれども、どれだけ理解していただけたかどうかはわかりません。

ただ、掘っていくと皆さんは地下水が吹き上げてくるんじゃないかと。だから、吹き上げるまで掘りましょうという話なんです。それで、我々がたまたま掘っていたところは大地の上なものですから、普通のこういう井戸じゃ上がらないぐらい深いところなんです。それでも吹き上げてくるんじゃないかという期待で、皆さんわくわくしていたんですけども、そういうことでちょっと説明を試みたんですが、どれだけ理解していただいたかどうかはわかりません。

そのときに地盤の成り立ちみたいな、どういうふうにしてこの土地はできてきたんだよというような説明文をウェブで出したりしてみたんですけども。

若松： そういうことができるのはやはりコンサルを長くやられていた方だから、そういう土質な部分から地形まで、地域の地盤に対してマクロな見方ができるので、そういう NPO 法人を支援するような学会になればいいと思います。ただ、私はこういう NPO 法人をつくりましたなんて言っても、なかなかこの指には止まってもらいにくいし、賛同してくださる方を集めるための学会の支援体制が必要ですね。

最近、支部の活動はすごく活発になっているので、支部はかなり市民に近づいた目線でいろいろ活動されて。

沓沢： それは、どうですかね。私は、あれに対してはかなり疑問があるんですよ。いわゆる関東支部の更に県のグループとかでやっていますけれども、結局、県のグループというのもそこに住んでいる人なのか、そこに勤めている人なのか、非常にごちゃ混ぜで、特に千葉などは東京に近いじゃないですか、ほとんどが東京を向いているわけですよ。それで、千葉市に来るよりは柏の人なんかは東京に来た方がずっと近いわけです。千葉を通り越していく人というのは、銚子とか館山の人しかいないですから。

そういった意味では、あの支部の会員の個人までのつながりというのはほとんど効果はないんじゃないかと思います。かえってそこに集まってくる世話をする人たちが、ただ単に労力を無駄にしているだけじゃないかなという気もしないわけではないです。

若松： 活発化しなければと、そのことばかりが先行すると、本当に市民のためになっていないのに行事の回数をふやすとか、そうするとその担当者の負担も大きいですね。出版物を出さなければとか、あっちの支部であれをやったからこっちの支部でもしなきゃと言うと、何か合戦みたいになってしまうので。

沓沢：今はどうなんですか。特に講習会なんかは動員をかけなくても人が集まるんですか。昔、私がそういう事業部でやっているころにはなかなか人が集まらないので、会社をお願いして何人ぐらいずつ出してくださいみたいなことをやるのが我々の係だったんです。

末岡：今は、多少は動員のケースもあるかもしれませんが、結構テーマを決めるときにちゃんと興味のある、役に立つというのを厳選してやっていると事業部などからは聞いています。昔はそういうことが確かにあったような気がしますけれども、それよりは良くなっているんじゃないかと思います。余り無理をしていないというか、そういうことがありますね。

あとは、昔は100人、200人の話だったんですけども、JGS会館でやるからそんなに人数は、入れませんし、経済的にやろうと思ったらそれぐらいの人数でちょうどいいというところもあります。

若松：理事会の理事のバラエティとかはどうなんでしょう。やはり官民学のバランスの中で理事は選ばれるのですか？

田中：今はそんなバランスなんかとれていないと思いますよ。ものすごくアンバランスだと思いますね。

若松：私が某学会の女性初の理事になったときに、「女性会員を増やしたいから若松さんに理事になってもらったんだ」と当時の会長が仰いました。また、「地盤工学会でも女性理事が2人出ましたよ」と、わざわざ私に言って来られた役員がおられました。こういうことがトピックになるようでは、まだまだという気がします。

寺師：でも、モデルとしてはいいんじゃないですか。若松先生みたいな方が活躍されて理事でいるということは、動機がどうであったかは別として、後からくる若い人たちは皆、私も頑張ればというふうに思うわけだから、それはいいんじゃないかと思います。

末岡：地盤工学会の多くの本質的問題が、全部この短い1時間45分の中に非常に出ているような気がするんですけども。

齊藤：今の御意見ですが、やはり理事に就任されるとか何とかというのは素直に私は受け入れたいと思うんですね。現実に私のところの状況を申し上げましたけれども、女子学生が増えている。増えている女子学生を、地盤工学ならば地盤工学の方とにかく向かわせる。興味を持っていただく。更に、こういうところに入って実際のアクティビティに参画していただける。これをどうするかということで、むしろ皆さんからお知恵をいただいてやっていただけると、私は学校に帰ってまず3年生に対してこういう状況だと、ばちっと言えるわけですよ。

事実、私どものところでは女子学生応援のGPみたいなものを行っているわけです。そこではとにかくIBMだとか何とか、いろいろなところから来て、学科の範疇を越えて女性の活躍の在りようというものの話を聞くということをやっている

わけですね。そういうものを、やはりこの場を使って是非やっていただけると、私は本当に応援団長になってそういうことがお手伝いできるかと思うんです。

若松： 中央大学に今から入り直したかったです。私は大変な時代だったですから。

末岡： 時代が変わったんですね。

若松： 私の時代は、ここは女の来る場所じゃないみたいな雰囲気、勉強に専念できなかったですね。斉藤先生が中央大学に入られて、それは大変いいことだと思います。

斉藤： 私は全然、貢献していません。日建設計にいたときは、ハラスメントの講習会があると、おまえ行ってこい、おまえが一番危険性が高いということで、私は10年間いましたけれども、ハラスメントの講習会には6回から7回出ていますよ。でも、それが身についたかどうかはわかりません。

末岡： 大変すばらしいというか、本当に辛辣でもあるし、本質を突いている話題が1時間50分の間にたくさん出たと思います。ただ、これをずっと話していると尽きないので、最後に理事でもあられる委員長からどうぞ。

桑野： 耳の痛いお話もいろいろありまして、今日は本当にありがとうございました。今日の座談会に先立って、楽しみ半分、あとはどんなお話が出るか、恐ろしさも半分といったようなところでありましたけれども、本当にあっという間に時間が過ぎたような気がします。

続きは懇親会でということでまたお願いしたいんですが、いろいろなお話が出たので、私の力でこれをまとめるというのはちょっと無理かもしれませんが、ざくっと言いますと、一応、開かれた学会というのを目指して活動しているつもりではありますが、いろいろな意味でギャップがあるといったような御指摘を今日は受けたと思います。

ギャップと言いますのは、いわゆるエリート会員と一般会員との乖離というようなお話も出ましたし、それから学会と市民とのスタンスや目線のギャップ、それからいろいろな分野を取り込んで会員を増やすと同時に守備範囲も広がっていくというような動きは過去にも現在にもありますが、そういう異分野の方たちをスムーズに取り込んでいけなかったような歴史もあって、やはりそういう分野間のギャップといったようなものも依然としてあるといったような御指摘をいただきました。

先ほど斉藤先生に、非常に今回の多様性というテーマに対してもびっぴりの御発言をいただいたと思います。やはり行政の方も含めていろいろな立場の方に参画いただいて、それを通じて学会の活動の成果を市民の方たちにもっと具体的な形で示していくようなことができない限り、やはり説得力もないし、学会としての魅力も高まっていかないのではないかなという御指摘をいただきましたので、非常に微力ではあるんですが、多様性の推進ということに背中を押していた



だいたような気分でおります。

そういうことでまとめになっているかどうかはわかりませんが、今後も頑張っていきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

末岡： 本当に皆さん、御苦勞様でした。いろいろなご意見を頂戴し、本当に有意義な座談会でした。